

## 広島文教大学オンライン子育て支援「親育ち応援講座」 2020年度 実施報告

田藤 亜希<sup>1)</sup> 金子 留里<sup>2)</sup> 宇都宮 千賀子<sup>3)</sup> 濱田 さつき<sup>4)</sup> 植田 智<sup>5)</sup>

### 広島文教大学オンライン子育て支援「親育ち応援講座」について

広島文教大学では、教育活動そのものが地域貢献となる活動の一環として、子育て支援プログラムであるノーバティズ・パーフェクト・プログラム（以下、NPプログラム）を2007年より開催してきた。NPプログラムは、0歳から5歳までの子どもをもつ親を対象に、ファシリテーターが進行を務め、参加者それぞれが抱えている悩みや関心事をグループで話し合い、つながりを深めることにより、仲間と互いに助け合って子育てしていくことを学ぶ体験学習型のプログラムである。参加者である親が安心してプログラムに参加できるように託児を必須として実施することになっている。本学では、毎年、学生が子育て支援サークルのスタッフの指導を受けながら、託児を行ってきた。

2020年は新型コロナウイルス感染症の猛威が瞬く間に世界規模で拡大し、未知のウイルスへの対策として外出自粛が求められ、私たちはこれまでの生活様式の変換を余儀なくされた。本学においても前期授業はオンラインを中心とした非対面で行われた。毎年、NPプログラムの準備は6月に開始するが、本年度の会議では、対面によるプログラム実施は、乳幼児やその親たちにとって感染リスクが高いと判断した。また、プログラムの性質上、オンラインでの開催は困難であるため、やむなく中止を決定した。しかし、運営スタッフは、新型コロナウイルスの影響で外出自粛が求められる時

だからこそ、子育て支援の場が必要であると考え、オンラインでの子育て支援プログラムを試みることにした。本講座では、参加者同士が現在の子育てを振り返りながら話しをすることで悩みやストレスの緩和を図ること、日々の子育てに役立つスキルを身に着けること、そして講座終了後も互いに支え合うことのできる参加者間のネットワークを作ることを目的とした。

### 実施概要

#### (1) 主催

広島文教大学人間科学部心理学科・広島文教大学心理教育相談センター

#### (2) 後援

広島市安佐北区・公益財団法人ひろしまこども夢財団

#### (3) 開催日

10月1日から10月29日の毎週木曜日（全5回）  
10:00～11:30、及び12月17日木曜日に任意参加のおしゃべり会（1回）を実施した。表1に、講座の日程および各回のテーマと内容について示す。

#### (4) 場所

ファシリテーター及び運営スタッフは、プライバシーが確保できる広島文教大学心理学科演習室を使用した。参加者は全ての回において、各参加者の自宅よりインターネットに接続し参加した。

#### (5) 使用機器・ツール

ファシリテーターおよび運営スタッフは、広島文教大学心理学科所有のウイルス対策を施したノートパソコンを使用した。参加者には、パソコンかタブレットの使用を推奨していたが、結果的に参加者は各自のスマートフォンかタブレットを使用して参加した。使用ツールは、Microsoft 社が

1) 広島文教大学人間科学部心理学科  
2) 広島文教大学地域連携室  
3) 広島文教大学人間科学部福祉学科  
4) 広島文教大学学生サポートセンター  
5) 広島文教大学人間科学部心理学科

表1 講座日程のテーマと内容

日程	テーマ	内容
10/1	「子育てしていて気になることは何？」	子どもについての困りごとをみんなで出し合い話します。
10/8	「子どもの成長と親のかかわり」	子どもの成長ぶりを振り返り、親のかかわりについて考えます。
10/15	「子どもとの温かい関係づくり」	子どもと良好な関係を作るヒントをご紹介します。体験してみましょう。
10/22	「親の感情を爆発させないために」	分かっているのに止められない“親のイライラ”を考えます。
10/29	「これからの私たちにできること」	全体の振り返りと情報交流会
12/17	おしゃべり会	任意参加。講座後の生活について。

提供するコミュニケーションツールである Teams を使用した。

#### (6) 広報

公益財団法人ひろしまこども夢財団の運営する“イクちゃんネット”のホームページ掲載と情報送信サービス、広島文教大学心理教育相談センターのホームページ掲載を行った。また、過去2年間のNPプログラム参加者に案内を郵送した。

#### (7) 参加者

0歳から5歳までの乳幼児を育児中の母親5名。

#### (8) スタッフ（敬称略）

講座ファシリテーター（3名）金子 留里，宇都宮 千賀子，濱田 さつき

学生スタッフ（1名）広島文教大学大学院教育学専攻臨床心理学コース2年生

運営スタッフ（4名）植田 智，福田 雄一，平原 明日香，田藤 亜希

#### (9) 倫理的配慮

広島文教大学倫理調査委員会の審査・承認を得て実施した。

### 特徴

参加対象者を原則として、保育園・幼稚園に通う子どもを持つ親とした。これは、講座に集中することによって、子どもの安全確保に注意が行き届かない可能性があることやオンラインという環境の制約上、ファシリテーターや他の参加者が気付いても物理的にすぐに手を差し伸べることができないことから、子どもの安全を優先したためである。そのため、講座開催時間は、子どもが保育園・幼稚園に通っている時間帯に設定した。参加人数については、タブレット等の小さな画面の機器で参加してもファシリテーターを含め、全員の表情等がある程度確認できることを考慮し決定した。

当初は、Web会議ツールの中でも一般的によく使用される Zoom の使用を検討していたが、セキュリティ面等をより慎重に検討した結果、Microsoft Teams を使用することとした。参加者の使用機器が多様であったり、機器の操作に不慣れな参加者もいる可能性があることから、できる限り参加者の行う機器操作が少なくなるよう注意を払った。

ファシリテーター1名と運営スタッフ1名は、オンライン子育て講座の安全講習を受講し、オンラインで子育て支援を行うにあたっての、インターネットやツール使用上の注意点を含め、広報および講座中の安全対策等についての研修を受けた。

講座参加の手順やツールの操作について、運営スタッフが本学独自のマニュアルを作成し、事前に参加者に郵送にて送付した。

ファシリテーターは参加者と事前にオンラインで個別面談を実施し、講座参加の手順やツールの操作、及び、現在の子育ての状況について確認した。また、やむを得ない事情で子どもが同席する場合の安全面の配慮について、事前面談の際に参加者と確認を行った。講座内で使用する資料に関しては、印刷したものを事前に参加者に郵送した。

毎週講座の前日の午前中に招待メールに参加者に送信した。

講座には、その回の進行を担当するファシリテーターと参加者のほかに安全確認サポート担当と機器の操作等をサポートするテクニカルサポート担当の運営スタッフが会議に入室した。

事前に参加者の電話番号を確認しておき、なんらかの事情で会議への入室ができない場合や途中で会議を退出してしまった場合に備えた。

毎回講座終了後にファシリテーターと運営スタッフはミーティングを行い、講座の振り返りと改善点の確認を行った。

次に、講座の各回の目的、プログラム内容、まとめについて紹介する。各回の担当者は、第1回・第2回が金子留里、第3回が宇都宮千賀子、第4回・第5回が濱田さつきであった。（田藤 亜希）

### 第1回：子育てしていて気になることは何？

●日 時：2020年10月1日（木） 10：00～11：30

●参加者：5名

#### 1. 目的

参加者が、自分の子育てについての困りごとを出し合い話して、他の親子の様子を知り困っているのは自分だけではないと少し安心した気持ちになる。

#### 2. プログラム内容

##### (1) オープニング・オリエンテーション

- 主催者挨拶（福田センター長）
- 講座の目的と流れについて説明
- 参加にあたっての注意事項
  - ・お互いを尊重しながら積極的に参加する等の他、オンラインならではの諸注意

##### (2) アイスブレイク

- 参加者の自己紹介
  - ①名前、②住所、③子どもの年齢・人数、④マイブームについて自己紹介する。
- 「ゲー・チョコキ・パー・アンケート」
  - ・今使用しているモバイル機器は？
    - PC    🖱️ タブレット    📱 スマホ
  - ・出身地は？
    - 市内    📍 県内    📍 県外
- 「あなたのふるさとのおすすめお土産は？」
  - ・チャット機能で、自分の出身地の名産や土産を各自入力し全員に送信して紹介する

##### (3) 休憩5分

##### (4) ディスカッション「子育てしていて気になること」

- 自分が気になることをチャットに入力、全体に送信して共有する
- 全員の関心ごとをファシリテーターが紹介しその内容についてそれぞれの参加者から説明をしてもらう。
- 共有した関心ごとについて詳細を聞き合いお互いの経験を話す

#### ＜参加者の関心ごと＞

子どもの爪かみ、イヤイヤ期の対処法、虫歯予防、親のイライラ、偏食・小食 等

※具体的な解決方法を見つけることよりも悩みごとを全体共有することを優先し、悩んでいるのは自分だけではないことを感じ参加者同士の親近感を増加させるようにした。

#### (5) 振り返り・チェックアウト

- 今日の流れの振り返り、内容の確認
- 参加者から感想を一人一言ずつ聞く
- 次回についてお知らせ

※今回出てきた困りごとに関しては、今後の講座の中で取り上げることを伝えた。

#### 3. まとめ

これまで実施してきた子育て支援講座はすべて対面式でのグループワーク中心の内容であったが、今回初めてオンラインで開催することになり、画面越しの対話でどこまでリアルなグループワークができるのか不安があった。そのため、ファシリテーターが参加者にきちんと伝わる指示出しをしているか、参加者同士の話し合いが盛り上がるように場の雰囲気づくりをしているか、想定した時間通りに進められる内容になっているか等、ファシリテーターとして不安な部分について常に気を配りながらプログラムを進めることにした。

特に初回は、参加者の様子によって臨機応変に変更できるよう内容を詰め込み過ぎないようにし、参加者の安心感や居心地の良さを優先したプログラム作りを行った。前半の導入部分に関しては、オンライン講座に不慣れな参加者が不安にならないように、アプリケーションの操作説明を丁寧に行い、アイスブレイクの中にもアプリケーションの操作を取り入れて緊張感をほぐすように心がけた。

後半のディスカッション部分においては、小まめに参加者の名前を呼んで発言を促し、発言が出るまで余裕をもって待つことで、徐々に参加者からの発言が増えてきた。最終的には参加者同士でファシリテーターを介せず対話もできていたので、次回のディスカッションが活発になるのではないかと期待することができた。

参加者からは、「オンラインでの講座に多少不安があったが、楽しく過ごせた」「ほかの人の様子を

知りが楽になった」「次回からの内容が楽しみだ」などといった感想があり、前向きに講座受講に取り組もうという気持ちが見えたように感じた。

5回連続の講座の導入にあたる初回としては、次につながるスタートが切れたのではないかと思う。

(金子 留里)

## 第2回：子どもの成長と親のかかわり

●日 時：2020年10月8日(木)10：00～11：30

●参加者：5名

### 1. 目的

子どもの成長と子どもへの親の関りを振り返り、子どもの成長に合わせたより良い接し方について考える。

### 2. プログラム内容

#### (1) オリエンテーション・チェックイン

- 本日の講座の目的と流れについて説明
- 参加にあたっての注意事項
- 前回の振り返り
- 参加者一人一言（前回の感想とその後の様子）

#### (2) アイスブレイク

- 「うちの子自慢」  
子どもに関して最近あった嬉しいことを一人ずつ全員が話し聞く。

#### (3) ワーク1「子どもの成長を振り返る」

- 子どもの成長過程の図表を見ながらわが子の成長で印象深かった時期にチェックを入れる。
- 今まで親がどんな関わりをしてきたかそのエピソードを書き入れる。
- 個人ワークの感想を書き留める

#### (4) 休憩5分

#### (5) ワーク2「子どもへの親の接し方を振り返る」

- ワーク1の感想を全員で共有する  
※子どもたちがそれぞれのペースで成長していることや親が関わってきたことを再確認。
- ワークシート（図1）「親の思い子どもの思い」に子どもの困りごとを①に記入する
- 困りごとの場面において「親として子どもに望むこと」を②に記入する
- 「自分が子どもの立場であれば感じること」を③に記入する
- それぞれのワークシートを見せ合いながらディスカッションする

○問題解決アプローチ（図2）について説明する。

○ディスカッションと問題解決アプローチを参考に子どもとによりよい関係づくりのために自分にできそうなことを④に書き出す。

●親の思い 子どもの思い		
①子どものことで気になること	②親の思い ③子どもの思い	④よりよい関係のためにできること

図1 ワークシート

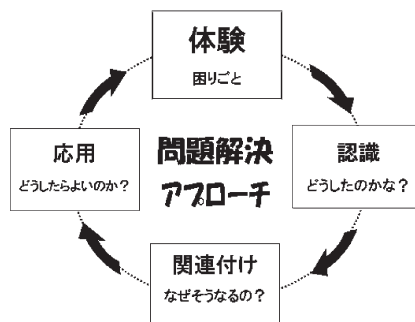


図2 問題解決アプローチ

#### (6) 振り返り・チェックアウト

- 今日の流れの振り返り、内容の確認
- 参加者から感想を一人一言ずつ聞く
- 次回についてお知らせ

### 3. まとめ

参加者からは「子どもがいろいろできるようになったことを改めて知った」「子どもの立場に立って子どもの気持ちを考えるというのが新鮮だった」「親の思いと子どもの気持ちの折り合いの付け所を探りたい」などという感想があった。

子育て中親は忙しく、良い子に育てたいと頑張るあまり子どもの「できないこと」に目が向き、それを困り事だとすることが多い。ワーク1では、親が子どもの成長過程を振り返り、子どもが自分で頑張っているようになったことや、子どものペースを尊重して支えてきた親の関わりや気持ちを思い出してもらった。そのうえでワーク2では、親子それぞれの思いを尊重しながらできる、より良い困り事の解決方法について考えた。

参加者の感想から、今後困りごとに対して一歩引いて子どもの思いを考える必要性を感じてもらえたのではないかと思う。

(金子 留里)



### 第3回：子どもとの温かな関係づくり — CARE™ のエッセンスを用いたオンライン講座 —

●日 時：2020年10月15日(木) 10:00~11:30

●参加者：4名

#### 1. 目的

親子共にストレスの高い状況が長期に続く中で、親子関係を温かに維持することを目的に、具体的で取り組みやすいスキルを保護者に伝えることが必要だと思われた。そこで講座の中盤で CARE™ (Child-Adult Relationship Enhancement: 子どもとおとなの絆を強めるプログラム) のエッセンスを具体的に伝えることとした。

CARE™ は、米国シンシナティ子ども病院において2005年に開発された心理教育的介入プログラムであり、日本には福丸(CARE-Japan代表)により2008年に導入された。コミュニケーションに焦点をあて子どもとの絆を深める際に大切なことを大人が習得し、より温かい関係を築くこと、さらにその関係をベースに効果的で適切なしつけを行うことで、結果的に子どもの問題行動の改善を図ることを目指している。PCIT (Parent-Child Interaction Therapy) に基礎をおいているが、PCITは、子どもと親の双方を対象にした、ライブコーチを取り入れた継続的かつインテンシブな心理療法であるのに対し、CARE™ は予防的な視点も含んだ一般的な子育て支援としても実践可能な心理教育プログラムである(福丸, 2013)。本来プログラム実施は、対面で4時間程度を要する。

#### 2. プログラム内容

参加者のもとに送付した資料(図3)を用いながら、CARE™ のエッセンスとなる、子どもとの温かな関係を築くために大切なスキル(3P: praise 具体的にほめる, paraphrase 繰り返す, point out 行動を言葉にする)と、できるだけ減らしたいスキル(3K: 質問, 命令, 禁止)を説明した。本来は参加者同士が親役・子役の双方を体験するロールプレイを行うが、オンラインなので画面に向けての簡単なロールプレイに取り組んでもらった。

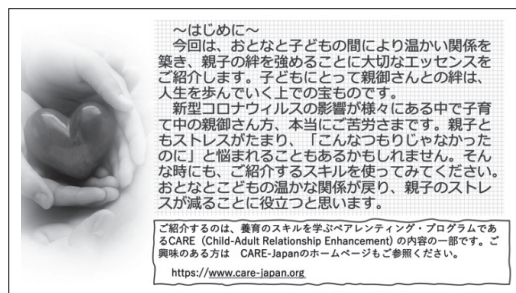


図3 第3回配布資料の導入部

#### 3. 結果

実施後のアンケートによると、説明やロールプレイについてオンラインでも理解ができたと評価されていた。家庭での実践については全員が実践され、全員から子どもに変化がみられたと報告された。「きょうだいげんかをせず穏やかに過ごせたことに驚き、効果を実感した」、「子どものリードについていくと後の行動の切り替えがスムーズだった」、「繰り返すだけで子どもが急に話すようになり驚いた」、「具体的にほめると同じ遊びをしても子どもがうれしそう」など。2ヶ月後のフォローアップセッションにおいても継続されていた。

#### 4. まとめ

オンライン講座の中で心理教育的プログラムの CARE™ のエッセンス部分を紹介した。子どもにイライラすることを何とかしたいということが共通する参加動機であった。講座受講により、家庭で意識的に3K 3P スキルの実践をすることができ、親子のコミュニケーションが増え、親子関係が温かく維持されているとの報告が全員からなされた。短時間であったが、オンラインでも、ある程度は CARE™ のエッセンスのスキルを伝えることができた。連続講座の枠組みの中である程度グループが打ち解けた中で実施でき、また引き続きの回で実践した宿題報告の時間をとれたことから、スキルが定着しやすかったと考えられる。

(宇都宮 千賀子)

### 第4回：親の感情を爆発させないために

●日 時：2020年10月22日(木) 10:00~11:30

●参加者：5名

#### 1. 目的

第1回目から第3回目までは、子どもを主体と

した内容であった。そこで第4回目では、主体を母親に移行し、わかっているのに止められない“親のイライラ”を考えるセッションとした。まず、参加者の学習目標を以下の3点に設定した。

- ①普段、どんな時にイライラするのかを振り返る
- ②ストレス解消のために色々な方法について知る
- ③自分にできるイライラ解消法を考える

そして、ゴールを「自分のイライラの状況を少なくするために、なにかできそうだという気持ちになる」こととした。

## 2. プログラム内容

### (1) オリエンテーション

- 挨拶、前回の振り返り（前回の担当者）
- 今日のテーマと流れの説明を行い、この時に学習目標、ゴールも併せて伝える。

### (2) アイスブレイク：私の夢

- まず、表情カードを使い、今の気分を表現してもらい、心の状態を把握する。
- 次に「5万円と1日自由な時間があったらどうしますか？」と投げかけ、各自紹介してもらう。

### (3) どんな時にイライラするのか振り返る

- 図4のワークシートを活用し、記入の説明を行う。
- 【左欄上】「イライラマックス時はどんな状態なのか」を記入する。
- 【左欄】「イライラマックス」までの私はどんな様子・状態なのかを記入する。
- 【中欄】「私はなぜストレスを感じるのか」を記入する。
- ここでいったん区切り、各自紹介する。
- 気づいたこと、感じたことをシートにメモして休憩（5分）に入る。
- 休憩後、休憩前に書いた感想を紹介する。
- 【右欄】「その状態をよくする（解消する）ために、やっていること、できそうなこと」を記入する。
- 右側の「やっていること・できそうなこと」を各自紹介する。ファシリテーターは板書する。
- 全員でディスカッションする。

図4 私のイライラ・ストレス見直し表

### (4) 講義

- 予防と対処法、リラクセス法、子育て相談窓口の紹介などを行う。

### (5) 結び

- 振り返り（一人ひと言）と次回のテーマの確認を行う。

## 3. まとめ

親自身のイライラ対処法については、事前面接の際に「なんとかしたい」という要望をいただいていたこともあり、より丁寧に対応することを心掛けた。とは言え、時間も限られているため、オンラインでの確に落とし込む工夫として、ワークシートの記入の際にそれぞれ3項目の見本を提示し、イメージしやすいようにした。参加者からは、「他の参加者のストレス対処法を自分もやってみたい」、「意外に予防的対処法を普段からしていたことに驚いた」などの意見が出され、新たな知識の獲得だけでなく、これまでの自分なりの対処法を再確認することができたのではないだろうかと感じた。

今プログラムでの改善点があるとしたら、時間を10分超過したことである。より丁寧に扱うあまり、前座のアイスブレイクを2段構成（表情カード＋私の夢）としたが、「私の夢」に絞っても特に問題ないと考えた。（濱田 さつき）

## 第5回：これからの私たちにできること

●日 時：2020年10月29日（木） 10：00～11：30

●参加者：5名

### 1. 目的

プログラムの最終回は、「これからの私たちにできること」と題して、「これまでの活動を振り返り、これから自分なりに前向きに進んでいこうという気持ちになる」ことをゴールとしてプログラムを

組んだ。学習目標は、以下の3点とした。

- ①これまでのプログラムを振り返り、評価する。
- ②子育ての中で大事にしていきたいことを考える。
- ③さまざまな支援先を知る。

## 2. プログラム内容

### (1) オリエンテーション

- ①挨拶、前回の振り返り
- ②今日のテーマと流れの説明
- この時に学習目標、ゴールも併せて伝える。

### (2) アイスブレイク：実は○○なんです

- 自己紹介のあとに「実は、○○なんです」から始まることを一つ紹介してもらう。

### (3) これまでを振り返り、評価

- ①これまでのプログラムを担当した講師が、それぞれの回を振り返る作業を行う（一人5～10分）。
- ②以下の3項目について、振り返りシート（図5）に記入し、各自紹介する。
  - 参加して印象に残ったこと
  - 学んだことや役立ったこと
  - これからの子育ての中で大事にしていきたいこと

図5 振り返りシート

### (4) 休憩5分

### (5) 子育て支援情報

- ①本学が行っている活動について紹介する。
  - 心理教育相談センター
  - ぶんこ広場
  - すずらん広場
  - ノーバディズ・パーフェクト・プログラム

### (6) 結び

- ①振り返り

○アンケートご協力をお願いをする。

○参加して感じたことを一人ひとりと話す。

### ②主催者代表よりご挨拶（心理学科長）

## 3. まとめ

本プログラムでは、当初、休憩後に感じたことや気づいたこと、聞いてみたいことなどのフリーディスカッションの場を設ける計画を立てていた。しかし、予想以上に時間が押してしまい、削除せざるを得なかった。今考えられる工夫としては、参加者の意見をうかがった上で休憩時間をフリーディスカッションに振り替えて実施することも可能だったのではないだろうか。

時間を要した箇所は、「振り返りの紹介」である。予め、振り返りシート（図5）を活用することで、参加者の考えをまとめやすくする、紹介の際に「シートを読んでください」と教示することで時間をかけない等の工夫を行ったが、これまでの振り返りということもあり、一人ひとりの思いも加わり、時間超過となった。しかし、参加者の方々が話しきることによって、満足度は高まったようにも感じられたため、振り返りの時間の十分な時間の確保の必要性を実感した。感想としては「みんな同じで安心した」「自分のことを振り返られて良かった」などがあつた。今後は時間配分も含めたプログラム全体の見直しが必要であると考えた。

（濱田 さつき）

## 参加者受講後アンケートのまとめ

受講後アンケートの結果、講座の満足度は高かった。理由としては、同じ様な悩みを抱えながら子育てしている仲間がいることを知り安心し、頑張ろうと思えるようになったことや子どもとの関わり方において具体的なスキルを知り実行してみることができたことなどが挙げられた。また、カメラをオンにしたオンライン開催という特性から、話したり考えたりしているときの自分の表情が確認できたことが良かったという意見もあった。

プログラムの企画趣旨として、親同士が話をすることによるストレス緩和や日々の子育てに役立つスキルを身に着けることを目的としていたが、概ね達成できたと考える。オンラインでの子育て支援プログラムの実施には様々な難しさや課題は

あるものの、子育て中の養育者の孤立化を防ぎ、育児不安や育児ストレスの軽減に有効な手段の一つである考えられる。

#### おしゃべり会について

講座終了、約1か月半後の12月17日に任意参加のおしゃべり会を開催した。目的は、参加者の交流を促すこと、講座の振り返りを行うこと、公認心理師を目指す大学院生が子育て支援についての学修を深めることであった。講座参加者5名のうち3名がおしゃべり会に参加した。ファシリテーター（2名）、大学院生（1名）に加えて、講座参加者のお子さんや運営スタッフ（1名）もモニターに顔を出し、和やかな雰囲気で行われた。前半、講座後のそれぞれの生活や変化について話し合った。その中で、参加者からは、講座後イライラが減ったことや講座の内容を思い出し子どもの立場になって考えてみるができるようになったことで気持ちが楽になったという感想があがった。大学院生からは、「子育てしていて大変なこと」、「コロナの今だから大変だと思うこと」、「子育てに関して、工夫していることやいい意味で手抜きしていること」、「子育てしていてよかったこと、幸せだと感じること」などの質問があった。「コロナの今だから大変だと思うこと」では、参加者からは、大変なことばかりでなく、逆に家族の時間が増えるなどポジティブに捉えている面なども語られた。「子育てしていてよかったこと、幸せだと感じること」では、玄関に小さな靴が並んでいるのを見たときや家族でテレビを見ているときに幸せを感じるなど、日常の何気ない瞬間に幸せを感じるなどが語られた。大学院生からは、自分も親にそんな風に思われながら育ってきたのかもしれない、母親になるのは大変なことだと思っており自分にできるか自信がなかったが、出産・子育てに積極的な気持ちになれたという感想が述べられた。

おしゃべり会では、リラックスした雰囲気でも、参加者だけでなく、大学院生やファシリテーター、運営スタッフが様々な年代・立場から会話を交わすことができ、有意義な情報交換や交流ができたと思う。また、講座後の生活について参加者にたずねることで、講座の内容がどんなふうに役に立ったかや次回以降の講座内容の検討について貴

重な情報を得ることができた。（田藤 亜希）

#### おわりに

これまで13年間継続してきた本学のNPプログラムは、安佐北区内のみならず、広島市内や近隣地域からの参加もあり、広島地域に広く根付いた子育て支援活動であった。そのため、このプログラムの中止は大きな決断であった。しかし、冒頭においても述べた通り、それだけでなく孤立しがちな子育て中の母親にとって、コロナ禍での外出自粛はさらに大きなストレスを生む懸念があり、本スタッフのオンラインによる子育て支援講座開催への意欲は非常に高いものがあつた。とはいえ、初めての試みであり、プログラム内容についても、またオンライン活用についても全くの手探り状態からの企画であり、実施直前まで不安の尽きない状態であった。

しかし、参加者アンケートにもある通り、おおむね好評であり、多少なりとも子育ての不安やストレスを緩和できていたことは、本スタッフにとって大きなやりがいとなった。

子育て支援におけるアウトリーチは、その活動に携わる者にとってわが国初の本格的な子育て支援策であるエンゼルプランの策定（1994）以来長年の懸案事項である。今回のオンラインでの子育て支援講座は、今後の子育て支援活動の新たな可能性を示すものとしてその意義は非常に大きいと言えよう。

末筆ながら、本講座にご後援いただいた広島市安佐北区役所および公益財団法人ひろしまこども夢財団に厚くお礼申し上げます。また、本学関係者に謝意を表するとともに、本スタッフの開催に向けた並々なめ決意と苦労に深く敬意を表したい。（植田 智）

#### 引用文献

福丸 由佳（2013）心理教育的介入プログラム CARE（Child-Adult Relationship Enhancement）によるアプローチ 児童青年精神医学とその近接領域，54（4），71-76.